籠行燈

美知代

一

結婚してから既う彼是れ半年にも成らうと云ふのに、つゞぞ夫婦は心の底から解け合ふて、華やかに笑ふた事も無く、秋の夜長を浸々語り明した事も無い、謂はゞ路傍の人が會々相寄つて家を作し、倶に其日を暮して行くかのやう。平穏な事は平穏でもあり、泰平無事なことも事實ではあるが、濤一つ起らぬ淵に湛へられたのは、死んだ水に外ならぬ、動かぬ處は如何樣外見に綺麗でもあらう、美しくもあらう、けれ共其底の底は闇然として、歡喜も無ければ快樂も無い、人の世の光は素より、其影すらも映さぬのである、一語で云ひ盡すならば、それは極めて無意義な生活を續けて居るのであつた。さればと云つて又、流石に短からぬ月日は夫婦をして、一歩を一歩より近く接近せしめぬでは無いが、譬へば夫婦は深さ知れぬ濠の兩岸に在る身、岸のはて迄は那方からも時の力を借りて進み得やうけれど、それから前方へは言葉の交りをする計り、双手を執つて蜜の香甘い花野をさすらふ杯と云つた樣な事は、夢を除けては出來相も無いので、之が抑々夫婦を隔てゝお互に、意味の無い生活を繰り返へすに止まらしめた譯である。けれ共如何に深い濠だからとて、隨分乘り切れぬものでもあるまい、否現に良人の作彌は眞實伍技を愛して、絶へず其乘切りにと勸めて居るのであるが、今の處伍技にはそれ丈けの勇氣がありそうにも見えぬ、よしや有つても出さうとはせぬらしい。

げに何物をか包む如く、うれたしい眼を擧げて、丁度秋は盛りの、黄菊白菊匂ひこぼれた花壇の中に、悄然と佇んだ儘何を見るとしも無う瞳をすゑた伍技は、其の細りとした肩を流して、たゆげに頭を傾げ乍ら、水際立つて美しい髪の、ふつくりと前髪を大きくとつたエス卷とやら、流行の束髪に結ばれたのを、沈み行く夕榮に彩らせて、やがて視線を足下に落し、幽かに嘆息を洩らした。思ひなしの故か、何處とも無く弱々しげな樣子の、寂しい憂ひ顔ではあるが美人である、眼元から鼻筋から口元迄、たゞ眉の邊りに失せやらぬ一抹の暗さが目に附くそれの外、誠に點の打ち處も無い、稍痩せ過ぎては見えるけれど、其痩せた處に得言はぬいとしさが籠つて、女性の美しさは其裡に動いて居る。夕陽を受けて、心持ほてつた耳の朶に後れ毛の二筋三筋、それさへいとゞ風情を增すのであつた。平常着らしい銘仙の袷に、二十一と云ふ年の割合には老質な節絲の羽織を重ねて、重々し相に庭下駄をふんで居る。

伍技の佇つて居る花壇、それを中心として庭は四方に擴がつて居る、左方は即ち建築物でくの字形に棟を並べ、聊か飛んで離屋がある、右方から脊面へ掛けては一面の林、柿の木もあれば栗の木もある、枝振り面白い松が臥龍の樣に蟠つて居る下には、小さな槭楓が紅の色を染め出し、榴柘の熟して口を開いた傍には、もの〻二抱もあらうと思はる〻公孫樹が

亭々として聳えて居る等、心行く眺めである、それから泉水築山なども可成り自然に近いのがあつて、芝生から花壇、花園から芝生と、小徑の有る處々に、濃紫の馬蘭、曇華の黄緋、絞りなんどが亂れ咲き、唯もう秋の色にみち〳〵て、今し崇嚴な夕榮の反射を受けて、刻々に移り行く色彩の微妙さ、殊にそが中に佇んだ伍技の姿は、如何にするも一幅畫中のものとしか見えぬ。良久あつて伍技は、思ひ餘つた身の、切無さ相に、再び吐息して顔を擧げると、早や四邊に夕暗の氣が迫つた、唯其中に菊の花の白いのが浮んで居るかの感じがした。と町を隔てゝ寺院の鐘が蒼穹を刻んで、其餘韻は林に落葉の音を殘し、伍技の横顔を撫で去つたが、秋の夕のうそ寒さに思はずも歩を回へすので。

『まあ曩刻迄あんなに美しいかつた夕榮が、もう此通り消失るんだもの……』とほろりとして『あゝ妾……妾何だつて結婚なんかしたんだらう!?』

胸を抱いて身悶えつ、血の氣のあせた頰を涙はしとゞに流れたが、思ひ回して離屋の前へ出ると、

『伍枝は如何した?』と婢に尋ぬる良人の聲、伍枝は一寸眉をよせたが、直ぐと打消す樣に頭を振つて足を早めた。

二

今は早や身をそゝる惱ましさ、胸苦しさを紛らすよしも無く、づき〳〵と宛ら毒ある針で突き刺される樣な頭腦を枕の上に打伏しに押當てた儘、身動きさへもし得ないで、伍枝は我と我が過去を思ひ續けて潛々と泣き入るのであつた。

今宵初めて過去をかへりみ、わがなし來つた事を惡いと悟り、而して泣いて悶える譯では無い、結婚後一日として胸の安まつた時とては無いのであるが、唯今宵程痛切に思悶えた事は無い。

あゝ何故、何故結婚したんだらう!

それは老先短かく只我のみを賴りの祖母の爲、その爲涙を呑んでの犧牲と、人前に云ひ譯の言葉はあらう、があれ程迄に堅く誓ふて、二年越し嬉れしい戀仲を許し合つて置きながら、いざと云ふ場合、わが爲め、吾とだに共ならば、如何樣な奈落の底に墮ち行くとも、夢恐れはせじと吾にも有難い人の心に背いて、唯祖母の爲め……あゝ返へす〳〵吾は俯甲斐無き身、曾ては嬉しれいにつけ、悲しいにつけ、繰り返し呼ぶ其御名に依つて、僅に生きたのであるものを——最早再び御目に掛る事は出來ない。ばかりか、心の中に戀しと慕ふ事すら、良人の前に罪と呼ばれなければならぬ悲しさ。つまり妾は孝と云ふ淺墓な目先きの義理に、躰よくわが意志の弱さをかくして、戀人を欺き、今又不貞の妻と成つた上、何も御存じ無い祖母をも、道德上の恐ろしい罪人としたのである。

堪らず起きかへつて、ふと隣りに眼をそらすと、かすかに鼾を立てゝ、籠行燈の光ほの暗う、良人は他愛も無い樣子。いつゑは夜すがらを、つきせぬ煩悶に、鉛のやうな胸を抱いて、まんじりともし得ぬのであつた。

—完—